

門に坐て布巾を披敷きて、日摩尼の手の名を称礼む。往き来の人を見哀ぶ者は、錢と米と穀物とを施して巾の上に置く。或るは巷陌に坐て称へ礼むこと上の如くす。日中の時に鍾を打つ音を聞き、其の寺に参入りて、衆の僧に就きて飯を乞ひて命を活けて数の年を経たり。帝姫阿陪天皇の代に至りて、知らぬ二人来りて云はく「汝を矜むが故に、我れ二人、汝の盲ひたる目を治さむ」といふ。左右のおの治す。治し了りて語りて言はく「我れ二日を還てかならず是の処に来らむ。慎待ちて忘れざれ」といふ。其の後久しからずして條に二の眼明く。平復ゆること故の如し。期りたる日に当りて待てども、終にまた来らず。賛に曰はく「善きかな、彼の二の目盲ひたる者、現生に眼を開きて遠く大方に通ひ、杖を捨てて空手に能く見能く行く」といふ。誠に知る、観音の徳の力と盲人の深き信となり、と。

法花經を写さむとして願を建てたる人日を断つ暗き穴
に願の力を頼みて命を全くすること得る縁 第十三

美作国英多郡の部内に、官の鉄を取る山有り。帝姫阿陪天皇の御代に、其

の国司役夫十人を召發して、鉄の山に入らしむ。穴に入りて鉄を堀取る。時に山の穴の口、忽然に崩れ塞り動く。役夫驚き恐りて穴より競ひ出づ。九人僅に出て一人後れて出づるひと有り。彼の穴の口塞り合ひて留る。国司上下、圧されて死にたりと思ふ。故に憫悵ふ。妻子哭き愁へて、観音の像を図繪き、経を写し、福の力を追贈りて、七々日を送ること已に訖る。時に独穴の裏に居て念はく「吾れ先の日に法花大乘を写し奉らむと願ひて、いまだ写さずして断えたり。我が命を全くして給へ。我れかならず果し奉らむ。闇き穴に居て憫悵ふ。生長れる時より今日に至るまでに、此の哀に過ぎたること無し」とおもふ。彼の穴の戸の隙に指刺すばかり開きて、日の光被至る。一の沙弥有して隙より入り来りたまひ、鉢に饌食を盤りて、以ちて与へて語りてのたまはく「汝の妻子は、我れに飲食を供り、吾れを雇ひて救ふことを勧ふ。汝はまた哭き愁ふ。故に我れ来るなり」とのたまひて、隙より出で去りたまふ。去りたまひて後に久しからずして、居る頂に當りて穴開け通り、日の光照り被及るなり。穴の開け通ること広方二尺余、高五丈ばかりなり。時に三十余人、葛を取らむとして山に入り、穴の辺より往く。穴の底の人、人影を見て叫びて言はく「我が手を取れ」と云ふ。山人側に蚊虻の音の如きを聞く。すなはち聞

一手拭。和名抄・澡浴具に「手巾 太乃古比」。二陀羅尼であらう。

三「日中」は六時のひとつ。僧は正午を過ぎたならば食事をしてない（上巻二十四縁・齋食）。多くの僧の食を残し集めたのである。

四観音を信仰したので視力が回復した、とされずに、観音を信仰したので治療する人がやって来て治療した、とされていることに注意すべきであらう。どのような治療行為がなされたのかは未詳。千手千眼観世音菩薩広大圓滿無礙大悲心陀羅尼經には「雪盲眼暗」の治療方法が述べられている。詞梨勒果（*Śālikarṣa*・ミロバランの果実）、菴摩勒果（*Amalaka*・ミロバランの果実）、*セイタカミロバラン*の果実をそれぞれ一個、搗き碎いてすりつぶし、白蜜または男子を生んだ女の乳をまぜて目にさし、観音像の前で呪を一千八遍となえ、室にこもって七日間、目に風をあてない。

五上文の「必来」是処二が視力の回復を意味していたことが示される。

第十三縁 三宝絵・法十七、扶桑略記・元明天皇条に引用。三宝絵より本朝法華驗記・下・一〇八に書承。本朝法華驗記より今昔物語集・十四・九に書承。

六岡山県英田郡。七美作国の調に「鉄がみえる（延喜式・主計上）。英多郡に隣接する播磨国佐用郡にも鉄を産する（播磨国風土記）。

へ下文より推せば、坑道は垂直方向に掘られていたか。

九穴をふさぐようにして次から次へと崩れてくる。

二 やつとのこと。

二穴をふさぐ状態になって、崩れる動きは止まった。

三穴の中にとじこめられた人の妻子。

三以下は、死者に対しての追善の行ないが述べられる。妻子は、男は穴の中で圧死した、と思つてゐるのである。男の生存を祈願しての行ないではない。

四 妙法蓮華經であらう。

五 中陰（中有）の期間。→中巻三十八縁。

六下文によれば、この食は妻子が追善のために供えたもの、と推測される。追善のための供物は最終的には死者のもとに届くと考えられていたのであらう。冥報記・上に、類似点をもつ説話が存する。山にて銀を採掘する男が穴にとじこめられたが、男の父の饌飯を受けた僧の呪願によつて一鉢飯を持った沙門が穴の中に来て男の飢えを防いだ、と。

六 すわつていた上方に。

元原文「自ニ穴辺ニ往」。穴の辺を通つて往く、の意であらう。

き怪びて、葛を取りて石に繋ぎ、底に下して試みる。底の人取りて引く。明に人なりと知る。葛を結ひて縄とし、葛を編みて籠とし、四の葛縄を以ちて籠の四角に繋げ、機を穴の門に立ててやうやく穴の底に下す。底の人籠に乗れば機を以ちて牽き上げ、持ちて親の家に送る。親属見て、哀喜ぶること比無し。国司問ひていはく「汝何なる善をか作す」といふ。答へて上の如く曰ふ。国司聞きて大に悲び、知識を引率て相助けて法花経を造らしめ、供養すること已に畢る。是れすなはち法花経の神しき力と観音の最靈となり。更に疑ふことなかれ。

千手呪を憶持つ者を拍ちて現に悪しき死の報を得る

縁 第十四

越前国加賀郡に、浮浪人の長有り。浮浪人を採りて雑の俗に驅使ひ、調と庸とを徴えふ。時に京戸小野朝臣庭麿といふひと有り。優婆塞と為り、常に千手の呪を誦持つことを業とす。彼の加賀郡の部内の山を展転りて修行ふ。神護景雲三年歳の己酉に次るとしの春三月の二十六日の午時に、其の長其の郡

の部内の御馬河里に有りて、行者に遇ひて曰はく「汝は何れの国の人ぞ」といふ。答へていはく「我れは修行者なり。俗人にあらず」といふ。長瞋り噴めて言はく「汝は浮浪人なり。何ぞ調を輸さざる」といひ、縛り打ちて驅せ徭へば、なほ拒み逆ひて、懇びて譬を引きて言さく「衣の虱も頭に上れば黒く成り、頭の虱も衣に下るれば白く成る」と。是くの如き譬有り。頂に陀羅尼を載せ経を負ふ意は、俗の難に遭はじとなり。何故ぞ大乘を持つ我れを打ち辱むる。実に験徳有らば、今威き力を示せ」とまうして、縄を以ちて千手経を繫へ、地より引きて去る。行者を刑てる処と長の家との程は、一里ばかりなり。長己が家の門に至り、馬より下りむとすれば、堅くして下るること得ず。忽に乗れる馬と空に騰りて行き、行者を垂てる処に到り、空に懸りて一日一夜を運て明日の午時に空より落ちて死ぬ。彼の身摧け損はるること竿の囊に入れるが如し。諸人見て懼おらずといふこと無し。千手経に説きたまふが如し「此の大神呪を呪すれば、乾枯樹すらなほ枝と柯と華と菓と生ふること得。もし此の呪を謗る者有らば、すなはち彼の九十九億恒河沙の諸の仏を謗ることとす」と。方広経に云はく「賢き人を誹謗らば、八万四千の国の塔寺を破壊る人の罪と等し」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

一詳細は不明であるが、滑車をその一部分に組みこんだ設備であろう。中国では滑車は武梁祠画像石にみえるのをはじめて古くから使用され、漢代には多用された（ニードム）。日本での使用は不明。ニしだいに。

三上巻三十五縁。四力。

第十四縁 悪業についての現報説話。三宝

繪・法八に引用。

五 伽藍達摩訳の千手千眼観世音菩薩大円満無礙大悲心陀羅尼經にみえる呪。大悲心陀羅尼。六 石川県河北郡、金沢市、松任市、石川郡あたり。越前国加賀郡は、弘仁十四年（八三三）三月一日に加賀国加賀郡、六月四日以降は加賀国加賀郡（後代には河北郡、石川郡。七 本貫の地（本籍地）を離れて他郷に流浪してゐる者。「長」は、いかなる立場の者か不明。諸注は浮浪人を取り締まる立場の者のように解するが、問題があろう。長自身も浮浪人であらう。八 統紀・和銅二年（七六〇）十月十四日条に、畿内と近江国との百姓が浮浪人と逃亡した仕丁等とを隠して私に驅使していることを述べ、それを禁じている。諸国に広くおこなわれたのであろう。九 京の人。諸を本貫の地とする人。法律用語。たとえば令集解・戸令にみえる。

二 未詳。本説話以外に所伝をみない。

二七六九年。「午」の日の「午」の時に「御馬河里」で優婆塞（この語にもウマに近い音が含まれている）を虐待した浮浪人の長が、翌日、「馬」に乗ったまま空中に止められ「午」の時に墜落死した、という説話展開であったと考え、真福寺本の三月二十七日に拠らずに前田家本の「三月二十六日」に拠る。三月二十六日は甲午（日本暦日原典）。

三 金沢市三馬（さん）あたり。三 庭麿をさす。本書では「行者」と称されるのは優婆塞。

四 天下百姓、多背三本貫、流石他郷、規避課役、其浮浪逗留、經三月以上者、即士斷、輸調庸、隨當国法（二）統紀・靈龜元年五月一日条（一）京人・流石・石鏡外一則貫當国而從事（統紀・靈龜元年八月二十五日条）。

五 攷証は、替叔夜の養生論（文選・五十三）「虱処頭而黑」、文選・李善注「抱朴子曰、今頭虱著其身、皆相染而白、身虱処頭、皆漸化而黑を指摘する。「衣果無定質（二）文選・李善注の譬喩。姿は優婆塞であっても僧と同じ立場であることを主張する。

六 自分を災難から守ってくれなかつた陀羅尼や経に対しての不満を述べる。

七 経巻を徹らしめ、責める。

八 原文「從地」に「地」。経巻を引つ括つて地にひきずりまわすのである。

九 「うつ」の表記を「拍」「打」「刑」「捶」と変化させている。

三 昔話の猫檀家には、トラという名の猫、棺の空中での上下、大悲心陀羅尼、の組み合わせをみせるものがある。喀羅夜哪（カレヤ）という陀羅尼の語音から猫の名トラが、「阿唎哪（アライ）」という陀羅尼の語音から「二」おりやが連想されたものであろうが、本説話の、馬が空中に浮かんて一日一夜おりてこない、という説話展開に似たところがある。

三 千手千眼観世音菩薩大円満無礙大悲心陀羅尼經。三 千手千眼。現存本の大通方広懺悔滅罪莊嚴成仏經にはみえない。